

上田有がの 表紙イラスト：赤恋

トリーニオン 3rd Party

2D FIGHTER DREAMIN 3rd Party



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『二次元ファイタードリーミン 3rd Party』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



三次元ファイター
トリーミン 3rd Party
2D FIGHTER DREAMIN 3rd Party

上田ながの
表紙／ねむ

登場人物紹介

Characters

にじの ゆめこ

虹野夢子

ラブラブエッチを愛しエッチな小説が大好きな女の子。愛と平和の使者「二次元ファイタードリーミン」に変身し、陵辱小説のヒロイン達を救うために陵辱小説世界に介入する。

くろはねあかね

黒羽紅音

『淫辱の魔法捜査官 羞恥陵辱 24 時』のヒロイン。作中で魔法捜査課の課長を務めている。見た目は少女だが、その実八百年を生きるロリババア。訳あって夢子と同居中。

かさ

さかさ傘

二次元ドリームノベルズ『式神戦巫女水輝 呪淫の生贄』でデビュー。その後も陵辱・和姦を問わず人気作を多数輩出するエッチな小説家。詳細は本文参照。

「あ……有り得ない。こんなの、嘘……でしょ……?」

それ程大きくない胸元に、あまり搾れていない括れの「女の子」が呆然と呟く。茶色がかつた髪を、肩の辺りで切り揃えた少女。瞳は丸く、クリクリとしている。健康的なピンク色をした唇がポカンと開いていた。

少女の名は――

「どうかしたのか夢子?」

虹野夢子。ラブラブエッチを愛する純真無垢な少女である。

「ど、どうかしたのかじゃないですよ紅音さん!! ち、ちよつとこれを見て下さい!」
場所は夢子の部屋。室内にはもう一人の少女の姿があった。

濃紺色のスーツに白いワイシャツ、青いネクタイというどこかの制服のような服を身に着けた少女である。腰まで届く長い髪に、どこか赤みがかつた瞳が印象的だ。スウツと通った鼻筋に、艶やかな唇――精巧に作られた人形のような顔立ちをしている。女である夢子の目から見ても見惚れる姿だ。ただし、悲しい程に身体付きは貧弱である。肉体の凹凸は多分――夢子よりないだろう。

彼女の名は黒羽紅音という。

この紅音に夢子は一冊の本を手渡した。

「これ? 何だこの本は?」

本のタイトルは『ワルプルギスの淫夢』。著者はさかき傘先生である。

「お主の嫌いな二次元ドリームノベルズではないか。何でまたこんな本を読んでおる？」
夢子はエッチな小説が大好きである。何故なら、エッチ小説の中には様々な愛が詰められているからだ。けれど、エッチ小説だからといってすべてが許せるわけではない。その存在を許容できないジャンルのモノも存在していた。それが陵辱小説である。ドリームノベルズはこの陵辱専門のレーベルだ。本来ならば絶対に手に取ることはない一品だ。

「何でって……さ、さかき傘先生が書いていたから……」

「……ああ、そういえば夢子はさかき傘作品が好きだったのう」

さかき傘作品——それはKTC作品における一大ブランドである。

さかき先生はかの有名な『つよきす』ノベライズをはじめ、二次元ドリーム文庫にて『まままま』や『双子姫のカノン』シリーズなどなど、愛があり、且つ抜けるといいう高クオリティ作品を連発している最高にして最強のエロ作家先生である。

このさかき傘先生が夢子は大好きだ。特に好きなのは『サムライにしえーしょん 弟子と修行三昧の日々』である。その作品内で一番のお気に入りシーンは登場人物『御神楽蒼乃』と主人公のエッチシーンだ。読むたびにドキドキしてしまう。あの婚約者がいるのに、主人公とのエッチに嵌まっていつてしまおう蒼乃の姿に、いつしか夢子が嵌まってしまった。

7

そんなさかき先生の作品である。幾らノベルズとはいえ——

「上田ながのみたいな酷いことは書かないんじゃないかって……そう思つて……」
買ったわけである。

なのに、その期待は儂く崩れ去つてしまった。因みに他にも色々陵辱モノを書いていることは、純真無垢な夢子は一切知らない！

「ふむふむ……ほほう。これはなかなか……おおお！」

紅音がパラパラとページを捲る。一ページ一ページ開くたび、彼女の口からは歓声にも似た声が漏れた。

「監禁しての調教陵辱か……これは凄いのう。小生意気そうでありながら気高い主人公のユリーシャが……まさかここまで汚い親父に堕ちていくとは……読んだことのない者は、絶対買つて読んだ方がいいぞ」

「だ、誰に向かっていつてるんですか!! それに、こ、こんな駄目ですよ! い、幾らさかき先生だからつて、これは許せない!! 幾ら何でもユリーシャちゃんが可哀想だよ」
グッと拳を握り、めらめらと怒りの炎を滾らせる。絶対にこんな陵辱小説の存在を認めはならない。

「ドリーム……チェンジ!!」

その怒りが、無意識のうちにキーワードとなつて口を突いた。

カアアアアッ!!

部屋中に眩い光が溢れ出す。輝きが夢子の全身を包み込んでいった。その中で、少女の身体はフワリと宙に浮く。同時に身に着けていた衣服が、光の粒子となって還元されていた。上下セット五百円の下着も同様に消え去る。剥き出しとなるのは白い裸体。どこまでも肌理の細かい白い肌に、膨らみかけの乳房、プリンツとした剥き卵のようなお尻が眩しい。未だ毛も生え揃っていない秘裂まで晒される。

しかし、それは一瞬のこと。次の瞬間には光の粒子が新たな衣装を構成していく。

身を包むは燃えるような朱を基調としたボディースーツ。胸元に添えられた大きなリボンが特徴的だ。秘裂を隠すのは白いレースの下着。同時にフリル付きの紅いスカートが構成され、腰回りを隠す。足を白いニーソックスが包み込む。スカートとニーソックスの間に作り上げられる白い絶対領域が艶めかしい。

更に靴まで作り上げられる。衣装と同じ赤い靴。踵部分にあしらわれた羽を思い浮かべる装飾が可愛らしい。同時に手を紅い手袋が隠す。

そして最後に構成されたのは、左右の耳元からアンテナのようなものを伸ばすバイザーだった。その姿はまるで戦う変身ヒロインのようである。

ここまでの変身プロセス文章は前回、前々回と一部を除いてほとんど同じだ。変身バンクという奴である。この文章まで一部を除いてコピペなくらいだ！

「二次元ファイタードリーミン!!」

変身完了。同時に夢子はビシッとポーズを取った。変身ヒロインたる者、どんな状況でもポーディングを外してはならない。

「おおお！」

これを見てパチパチと紅音が拍手をした。

二次元ファイタードリーミン。それは愛と平和の使者である。そして何よりも陵辱エッチを憎む二次元ヒロインだ。その能力は、どんな二次元世界にでも突入できるというものである。この能力を使い、夢子は陵辱小説世界に介入。犯される運命にある二次元ヒロイン達を救っているのだ!! 救えたことはないが……。

因みにこの部屋にいる紅音も二次元ドリームノベルズ『淫辱の魔法捜査官 羞恥陵辱24時』の主人公である。彼女が現在夢子と暮らしているのは色々ワケがあるのだが、その辺は『二次元ファイタードリーミンNEXT』で確認していただきたい。この紅音を元の世界に戻さなければならぬのだが、未熟な夢子の力では一度介入した世界にもう一度戻ることができない。その為、現在は帰還する術を探っている最中である。が、紅音自身は結構別世界での生活を満喫してしまっており、あまり焦った様子は見せていない。見た目は夢子と同じ十代半ばであるが、実際には八百年以上も生きている魔女だからこそ余裕だろうか？

「変身したってことは……行くのか？ この世界に」

紅音は『ワルプルギスの淫夢』の表紙に視線を移す。

「いや……今回は行きません」

しかし、夢子は首を横に振った。

「行かない？ では何の為に変身した？ 怒りのあまり無意識でやってしまったのか？」

「それも違います」

首を横に振る。

「じゃあ何の為の変身じゃ？」

紅音が不思議そうに首を傾げる。

「簡単なことですよ。少し考えてみたんです。どうやれば二次元ヒロインを救えるのかって……」

これまで夢子は二次元ヒロイン救出に二度失敗してしまっている。二次元ファイターとして、圧倒的な力を誇っているはずなのにだ。その世界のありとあらゆる能力をコピーできる上、二次元ファイターオリジナル能力も突入した世界の住人の力を遙かに凌いでいる。だというのに、失敗してしまう。ならばどうすればいいのか……？

「で、一つ思いついたんです。簡単なことだったんですよ。作者に頼んで書き直してもらえばいいんです」

「え、あ、だがそれは……」

作者に例えば手紙を書いて内容を書き直してもらっても、一度出てしまった本がなくなるわけではない。そういったことは前回の『二次元ファイタードリーミンNEXT』でも次のような文章で説明されていたはずだ。以下『内は『二次元ファイタードリーミンNEXT』よりの引用。

『なんとしてでもこの本の中で陵辱されているヒロイン達を救わなければならない。作者に手紙を出して抗議するという手もあるが、それでは一度出てしまった本は救えない』
夢子のこの考えに反している考え方ではないだろうか？

「確かにそうです。一度出てしまっている以上、後から書き直してもらっても何の意味もない。だから、逆に考えてみたんです」

「逆？」

「はい。つまり……この本が出る前の作者に頼んで、内容を改竄してもらえばいいって!!」

ぐぐつと拳を握り、ドヤ顔を浮かべる。ない胸をグツと張った。

「本が……出る前？」

「そうです！ 過去の世界に行つて、そこで直接さかき先生に『ワルプルギスの淫夢』は陵辱ではなくて、ラブラブエッチ小説にして下さいと頼むんです！」

体どれ程の感覚を味わえるのだろうか？

「いきますね」

最早止まることなどできない。

ずじゆつ！　ぐじゆるるうつ！

「んんんあああつ!!　や、やだつ！　は、挿入はいつてきてる！　挿入なつてきてますう!!」

腰を突き出す。小さな膣口を押し開き、二次元戦士は先生の膣中なかへと巨棒を挿入していった。

「あつ!!　あつあつあつ！　す、凄いです。せ、先生の膣中……ヒダヒダが絡みついてきます。わ、私のおちんちん……潰されちゃいそうなくらいに、凄く締めつけです！」

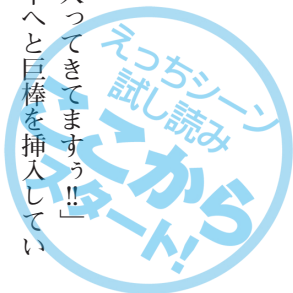
初めて味わう膣壁の感触は、ドリーミンが想像していた以上のモノだった。それ程までに先生の蜜壺は小さい。そんな膣道を肉茎で無理矢理押し広げていく。腰を奥に進めれば進める程、膣圧はより激しいものへと変わっていった。

「や、お、おおきすぎっ——ひっ！　そ、そこはっ!？」

「あ、な、何かに当たった……。これって……そうか、これが……」
肉先が膣中の何かに触れて止まる。先生の膣が大きく見開かれた。

「そ、それ以上はやめて……お、お願い……。そ、それだけは……」

純潔の証——先生がまだ女ではなく、少女である証である。必死に少女は首を横に振る。



眦には涙まで浮かんでいた。

「……今日は記念日ですね」

けれどどこまで来てしまつては止まることなどできない。

（私は先生の為に心を鬼にする！）

二次元戦士は自らに言い聞かせると、そこから更に膾奥へと腰を突き出した。

ブヂッ！ ブヂブヂブヂイイッ！！

「ひぎっ！ や、いたっ！ 痛いっ！ ひぎいいいっ！」

何かが破れる音が聞こえる。同時に結合部からは破瓜の血が、たらりと一筋流れ落ちていった。

「おっおっおっ！ おふう……。ああ、私が……先生を女にしたんですね」
嬉しかった。純粋な喜びを夢子は覚える。

「あ、や、やだ……。こんなの嘘……嘘です……」

少女は結合部を見つめて呆然と呟く。

「抜いて……抜いて下さい……」

「駄目ですよ先生……。本番はここからなんですからね」
懇願など受け入れない。

「でも大丈夫です。すぐに気持ち良くしてあげますから」

（自分を無理矢理犯した相手に与えられる快楽……。その屈辱を教えてあげますよ）

口元に笑みを浮かべると、二次元ファイターは容赦なく突き入れた腰を振り始めた。

ずじゅっ！　ぐじゅぶるうっ！

「くひっ！　あっ！　あっあっあっ！！　い、痛いっ！　痛いから、そ、そんなのやめて、お、お願いですからあ！！」

「あ、んんんんっ！　腰が引き戻されそう。凄く絡んでます。先生の褰が……。最高です」
 小さな肉穴に比べ、挿入されたペニスはあまりにも大きい。引き抜かれる肉茎に巻き込まれるように、肉褰が外側に捲れていく。美しい少女のモノとは思えない赤く熟した生殖器。半分程引き抜かれたペニスは、愛液でヌラヌラと濡れている。

「が、我慢できません！　んあっ！　あっあっあっ！！」

いやらしい光景。自分が少女を犯しているという事実には、夢子の理性は完全に吹き飛んだ。相手が先程まで処女だったことも忘れて、激しく腰を振り始める。

ずじゅぼっずじゅぼっずじゅぼっ！

「んひっ！　あっ！　く、くひいっ！！　ひっ、み、見ないで！　おっぱい見ないでえ！！
 あっあっんああっ！　はず、か、しいのっ！」

ただ腰を振って犯すだけでは終わらない。夢子は激しいピストン運動をしながら、悲鳴を上げる少女の胸元をはだけさせた。

少し汗ばみ、僅かに赤みを帯びた白い肌が露わになる。当然ほとんど膨らんでいない胸も……。

「小さくて可愛らしいおっぱいです。はあああ……んちゅ、んちゅ……」

すぐに二次元戦士は小さな乳房にむしゃぶりついた。サクランボのような乳首を舌先で転がす。チュツチュツと何度も口付けをし、カリツと甘く乳首を噛んだ。わざとらしく唾液を分泌させ、白い恥丘を穢していく。

「んんあつ！ な、舐めないでっ!! あつあつあつ、な、舐めないで下さい！」

乳房に刺激を与えるたびに、少女の身体はピクッピクッと震えた。

「んあつ！ んんんん」

拒絶だけではない。甘い響きまで漏らす悲鳴の中に混ざり始める。

「どうしたんですか？ はああああ……ふうっふう……もしかして、気持ち良くなってきましたですか？」

「ち、ちがっ！ き、きもちよくなん——んあああつ!!」

言葉の最中にもズンツと膣奥に肉先をぶつける。途端に先生の口から甘い悲鳴が漏れた。「嘘についても無駄ですよ。んっ、お、おんんっ……せ、先生って、凄く淫乱だったんですね。は、初めてなのにいきなり感じちゃうなんて……おっおっおっ」

「だ、だから、かんじ——っっっ!!」

ピストンを受ける少女が何度も身悶える。必死に声押し殺してはいるモノの、快楽を感じているのは間違いなかった。

「正直になって下さい。ほら、これがいいですよ？　こうして奥をグリグリされるのが気持ちいいんですよ」

子宮口まで肉先を押しつけ、腰を回す。

「んひっ！　んーんんーんっ！　い、いわないでっ!!　そんなことしないで下さい！　は、恥ずかしい」

「そうですね。恥ずかしいですよ。こんな淫乱な身体だなんてこと知られたら、私だつたら生きていけません」

「い、淫乱!?　わ、私は、私は淫乱なんかじゃ——あつあつあああつ!!」

さかき先生には屈辱を与えなければならぬ。責め立てるような言葉を向けながら、二次元戦士は腰を振り続けた。

ずじゅぽっずじゅぽっずじゅぽっ!

「お、おつきくなってる！　あつあん、わ、私の腔中で、ペニスが大きくなってます」
「はあはあはあ……大きくもなりますよ。だつて、んん、先生のアソコ、私のおちんちんに食いついて放そうとしてくれないんですもの。おっおっおっ！　こ、これじゃあすぐに射精でちやいます」

腰を一回振るたびに、肉棒は大きさを増していく。それに合わせて拡張される蜜壺。子種を搾り取ろうとするように収縮する膣壁の感触に、亀頭部は今にも破裂してしまいたい程に膨張していた。

「だ、射精す？　だ、駄目っ！　それだけは駄目っ！！　お、お願いだから、それだけは許してえ！」

膣内射精——少女にとってそれ程恐ろしモノはない。ましてや好きでもない得体も知れない相手の精液を流し込まれるなど、これ程の屈辱と恐怖はないだろう。

「いいえ、射精しますよ。ふうーふうーふうー……膣中に射精します。さかき先生に膣中に、たっぷり私のセーシを流し込んであげます」

だからこそやらなければならない。愛のあるエッチ以外で、膣内射精などしてはいけないことなのだ、教えないければならない。だから——、

ずじゅぼっずじゅぼっずじゅぼっずじゅぼっ！！

「と、止まって！　お、お願いだからとま——あつ、お、おっく、奥に当たって——」

「おっおっおっほおお！　で、射精ます！　イきます！！　せ、先生の膣中に、た、たっぷり、だ、射精してあげますねっ！　んほっ、ほっほっほううっ！！」

止まることなどできなかった。本能に突き動かされるままに夢子は激しく腰を振り、膣奥へと肉先を叩きつける。子宮口と亀頭が口付けをし——、

「トイレに行きたいんですか？　じゃあ認めて下さい。私は牝豚です。快樂奴隷の淫乱牝豚二次元ロリッ娘作家ですと認めて下さい。その上で、淫乱牝豚ロリマ○コを犯して下さい。だって、懇願して下さい……。そうしたら、行かせてあげますよ。おトイレに」
辛そうな表情だ。本当ならこんな顔を見たくない。だけれど、簡単に許すわけにはいかない。それに何故だろうか？

（もつとこんな顔を見てみたい）

そんな気分にもなってくる。

「い、いや……わ、私は……め、めすぶ、た、なんかじゃ……」

死にそうな程に恥ずかしく、苦しいだろう。それでも先生は首を左右に振る。女の矜持が最後の一線を護っているかのようだった。

「ふうん。じゃあここで漏らして下さい。たっぷり汚い腸液をお尻からブバツと飛ばして下さいね。皆さんも見たいでしょ？」

「み、見たい！」

「**■**女の脱糞シーン……はあはあ……」

興奮した男達の視線が、ヒクヒク震える菊座に集中する。

「ひっ！」

先生の血の気が引いていくのが分かった。

「ねえ、先生……」

そんな■女の耳元で二次元ヒロインは優しく語りかける。

「認めて下さいよ。ただ、私がさつきいった言葉をいうだけでいいんです。それだけで、先生はこの苦しみ……この恥ずかしさから解放されるんですよ」

「う、あ……ああ……」

「ただいっただけでいいんです。ちょっと受け入れるだけ。それとも……いいんですか？ここで意地を張って、皆さんの前で汚いものを撒き散らすようなことになっても……」

「そ、それは……」

衆人環境下での脱糞。これ程人の尊厳を破壊する行為はない。

優しく夢子は先生の頬を撫でる。

「私はそこまで先生を苦しめたくないんです。だからお願い。ね、先生……」

■女が安心するように、何度も優しく頭を撫でてあげた。涙で潤んだ少女の視線に、縫るような輝きが浮かぶ。

「頭のいいさかき先生なら、どうすればいいか……分かるでしょ？」

語ると同時にキスをした。ここに来てから何度も口付けをしてきたが、その中でも最も優しい口付けだった。

そして――、

「は、はい……」

先生はコクリと頷く。

「わ、私は……め、牝豚です……。か、快樂奴隷の……い、淫乱牝豚ろ、ロリッ娘二次元作家です。だ、だから私を犯して下さい……。私のロリマ○コをぐしゃぐしゃにして、く、くだ……。さい……。」

遂に少女は屈した。

「よくいえました」

ドリーミンは優しく先生の頭を撫でる。

「あ、こ、これで……。と、トイレに行かせてもらえ……。はあはあ……。る、んですよね？」

一刻も早くトイレに行きたいと、言外に伝えてきた。

「え？ 駄目ですよ……」

「——へ？」

が、あつさりとドリーミンは少女の希望を打ち砕く。

「な、何で……。だ、だって、い、いわれたとおりに……」

「だから、ロリマ○コを犯して欲しいんですね。だったら、まだトイレには行けませんよ。ここにいるみんなを満足させてからじゃないとね」

与えられた希望から、一転しての絶望。これ程二次元ヒロインにとって辛いモノはない。

その絶望を夢子は先生に直接教えてあげた。

(……後は仕上げ。陵辱っていう言葉さえも聞きたくなくなるくらい、滅茶苦茶に犯してあげますよ先生)

ニタリツと夢子は笑う。

「あ、む、無理……い、今なんて絶対無理……」

「大丈夫。意外と何とかなるモノですよ」

もう一度二次元ファイターは先生の頭を撫でた。

「お、んああつ！ は、挿入つて、挿入つてくつる!! お、おお、も、もれちゃ、漏れちゃいます！ むつり、無理なお」

ずぐつ、じゅぶぶふうつ！

床に寝転がった男。その上にロリ女は無理矢理腰を下ろすことになる。ズブズブと小さな蜜壺に、男の肉棒が沈み込んでいった。

「おお、女マ○コ。さ、サイコーだあ！」

「お、おつき、こんなのおつきすぎつる！ だつめ、やら、汚いのでちやうのお!!」
 パクパクと肛門が開いていくのが見て取れた。

「大丈夫……簡単に漏らさないよう、私が手助けしてあげますね」

開閉を繰り返す菊座に、夢子も我慢できなくなる。自らの肉棒を晒すと、女の小さな

肛門に肉先を密着させた。

「ずごっ！ ずぶじゅぶじゅぶるう。」

「むほっ！ お、おっおっおおおおっ！！ に、二本っ！ 二本なんて、お、お腹、お腹さけっる！ わ、私がつ、潰れちゃうっ！！」

「締めつけが、またきつくなってきた！ た、堪らん！！」

二本のペニスが少女の肉壁を押し潰す。小さな二つの穴にはあまりに不似合いな、二本の醜悪な肉棒。■女の身体など簡単に壊れてしまいそうですらある。

「じゅごっじゅごっじゅごっ！」

「う、うご、うごかないっでえ！ け、けずれっる！！ お、おながのなが、けずれひやうのお！ あっあっあっ！！」

容赦ないピストンを夢子はさかき先生にぶつけた。ガクガクと小柄な肢体が揺れる。

「す、ずごっ！ い、いつもより、凄くしまってます。おっおっおおお！ で、射精ちゃう。こんなの私もすぐに射精ちゃうっ！」

「お、俺もだあ」

二次元戦士と二次元読者のペニスは、きつすぎる締めつけにすぐに限界を迎えた。

「や、ダメダメダメダメダメエッ！ い、いま、今射精さないでエッ！！」

近づくと射精を先生は必死で止めようとする。が――、

「お、で、射精る！」

「いっく！ 先生のお尻の中で、わ、私イクうつ!!」

どびゅばっ！ びゅぶっ！ どっびゅどっびゅどっびゅゆるるう！

破裂しそうなまでに膨れ上がった二本のペニスは、同時に女の中に多量の白濁液を撃ち放った。

「あ、き、きった！ あ、熱いのが、わ、わたひのなかにきちやあ！ あ、や、い、いっぐ、やなの、こんなのイヤなのに、わ、わたひ、いぐっ!! いぐのお♪」

一週間の調教の成果ですっかり快楽に弱くなったさかき先生も、すぐに絶頂を迎える。クルリツと半分白目を剥きながら、何度も肉体を甘く震わせた。

「あ、ああああ」

先生の身体から力が抜けていく。ビュブツと結合部からは白濁液が溢れ出した。

「さあ次は俺だ」

が、これで終わりほしくない。ここはまだ始まりである。

「え……あ、わ、私……今イって……んひっ！ ま、また大きくなってる。お、お尻の中でまた大きく……」

「大丈夫です。私は最後まで先生に付きあいます。ね♪」

一人が射精を終えると、新たな男が挿入を始める。それと共に、夢子のペニスも再び勃

起を始めた。せめてもの罪滅ぼしだ。最後の最後まで、夢子も射精をし続けるつもりである。先生だけに苦しい想いはさせない。

じゅぶっ！　ぶじゅぶぶおっ！

「まった、は、挿入つて……あつあつあつあつ♪」

挿入と同時に二次元作家の表情は快楽に蕩け落ちた。

「お、俺は口だあ！」

その姿に男達の我慢が限界を迎える。

「おお、俺は手で……」

「身体に擦りつけてやる！」

挿入を待つ男達が、一斉に■女の身体に肉棒を押しつけた。

「んぼっ！　もぼっ！　もももももほおっ！！」

押し広げられる唇。白い肌に赤黒い亀頭が撚糸を残す。男と少女達の饅えた発情臭が、部屋中に広がっていった。

んじゅっ！　ちゅずっ！　ぐちゅずうっ！

「はあっはあっはあっ！　せ、先生……あつあつあつ、凄く綺麗です。オチンポ啜えて、犯される先生、あ、さ、最高です……」

「や、やべでエっ！　お、おどいっれ、い、いがせてえ!!　あつあつあつ♪　こ、こわれ、

こわれひやうの♪ わだひごわれひやうのお♪」

悲鳴を上げながらも、二次元作家は自ら積極的に肉棒に舌を這わせ、手でペニスを扱いた。自然と腰も揺れ動く。

「ああ、最高だ〜」

「こんなにエロイから、あんなエロイ本も書けるのかあ！」

男達も■女の身体に夢中になっていた。小柄な身体が相手でも何の容赦もしない。必死に腰を振り、■女を犯す。

じゅばんじゅばんじゅばんっ！

「いっぐ、ま、まらわだひいっぢやう♪ もらしぞうなのに、いっぢやうのお♪」

周囲に飛び散る汗。結合部からはビュッビュッと愛液が乱れ飛んだ。パンパンッと尻と腰がぶつかりあう音が響く。

「お、俺もイクッ！ が、我慢なんかできねえ」

「わ、わたしッも……おっおっおっおっ！ ま、また、また先生の、お、お尻の中に射精しちゃう!! 二次元ザーメン射精しちゃうの♪」

全員の動きがシンクロしているかのようだった。

ピストンをするたびに、大きくなっていく幾本もの肉棒。それらを膣奥に受け、喉奥を突かれ、全身を先走り汁でドロドロにされるたびに、先生の表情はだらしく崩れていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>